



# リバティ・アライアンスにおける標準化動向

みやた てるこ  
宮田 輝子

NTT情報流通プラットフォーム研究所

リバティ・アライアンス・プロジェクト(リバティ・アライアンス)は、「連携ID管理技術」のオープンな国際標準仕様およびビジネスガイドラインを確立することを目的として2002年に設立され、現在では世界各国から150以上の企業・団体が加盟している国際標準化策定団体です。

## 連携ID管理技術

「連携ID管理技術」とは、Webサービスの普及により、一個人が管理するアカウント数が急激に増加している背景を受け、複数のID(個人を識別するための情報全般。例えば、システムにおける「ユーザアカウント」も

IDの1つ)を安全にセキュアに各Webサイトが連携して管理する技術を指します。

この連携ID管理技術を実装するには、IdP(Identity Provider)、SP(Service Provider)、および連携IDという概念が必要です<sup>(1)</sup>。IdPとは認証情報を統合管理する組織、SPとはECサイトなどのサービス提供サイト、連携IDとはIdPとSPの間で、SP自身が個別に管理しているIDとIdP上のIDとを「仮名」と呼ばれる、ランダムに生成した文字列を利用して関連付けることを指します。

## リバティ・アライアンスにおけるこれまでの標準化活動

この連携ID管理の国際技術標準仕

様の策定のために、リバティ・アライアンスは、技術仕様策定のコンセプトを大きな「フェーズ」に分けて一般公開しています(図1)。フェーズ1はシングルサインオン(SSO)、フェーズ2ではフェーズ1のSSOの拡張および利用者の同意に基づく属性情報交換、フェーズ3ではSSO仕様をOASIS(Organization for the Advancement of Structured Information Standards)におけるSAML 2.0(Security Assertion Markup Language v.2.0)に採択、属性情報交換機能の拡張と各種Webサービス連携に向けた仕様を公開してきました。現在までにフェーズ1、2の仕様を完成<sup>(2)</sup>し、フェーズ3の最終仕様凍結に向けて現在準備が進められ

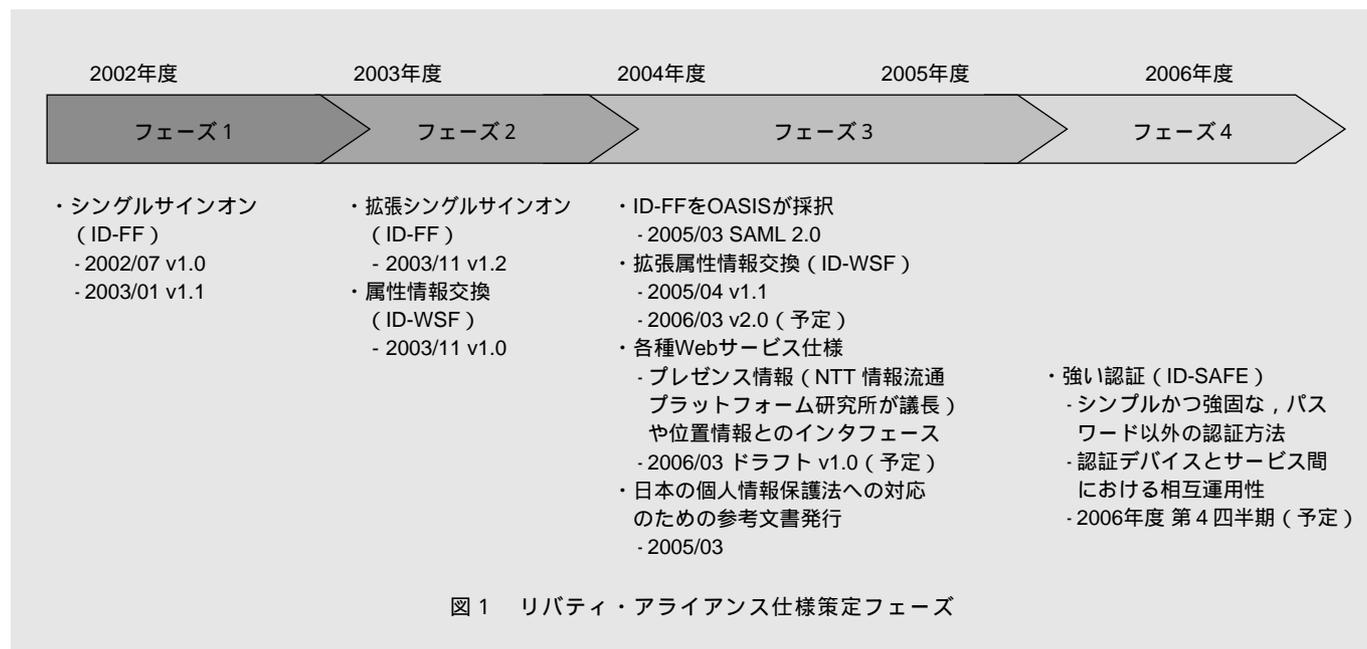


図1 リバティ・アライアンス仕様策定フェーズ



ています。

ここでは、リバティが定めたアーキテクチャ（リバティ・アーキテクチャ）について概要を紹介し、現在進められているフェーズ3の概要およびWebサービスの1つとしてデジタル放送規格における個人情報交換仕様として採択された事例を紹介します。さらに今後の活動として、NTT戦略とフェーズ4について紹介します。

### リバティ・アーキテクチャ概要

リバティ・アーキテクチャはSAMLとSOAP（Simple Object Access Protocol）に基づき、3つの主要コンポーネントから構成されています（図2）。

ID-FF（Identity Federation Framework）：連携IDなど、SSOを実現するためのもっとも基本となる仕様群。Ver.1.1では、連携ID、SSO、シングルログアウトが規定され、Ver.1.2では、IdP間連携、IdP匿名認証が可能になりました。

ID-WSF（Identity Web Service Framework）：利用者の属性情報をWebサービス提供サイト間で交換する仕様群。利用者の許可に基づくサービスサイト間での個人情報共有、アイデンティティ・サービスの発見および呼出し等が可能になります。

ID-SIS（Identity Service

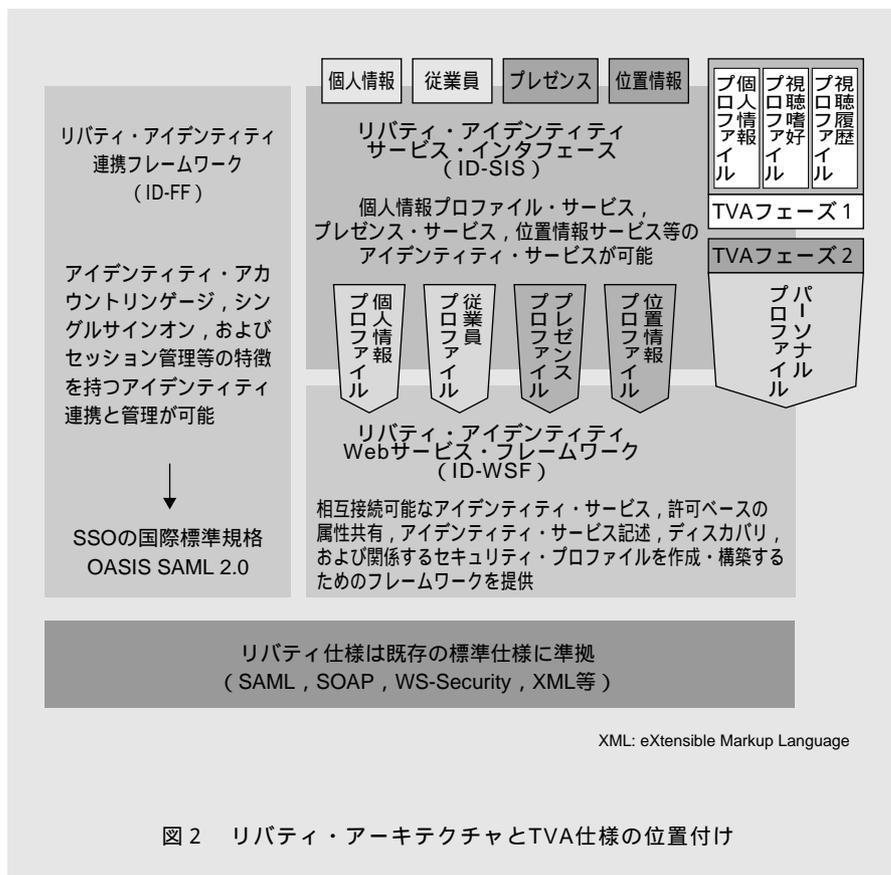


図2 リバティ・アーキテクチャとTVA仕様の位置付け

Interface Specifications) : ID-WSFに基づいたWebサービスを実現するための具体的なサービス・インタフェース仕様群。具体的なアイデンティティに基づくWebサービスとして、個人情報および社内サービスに向けた従業員情報サービスのための仕様が規定されています。

特にID-SISには、ID-WSFのインタフェースDST（Data Service Template）が不可欠です。ID-SISは各サービスごと規格化される可能性

があります。リバティ・アライアンスでは、多様なサービスに対応するための難形として、ID-WSF仕様群の中にDST仕様を用意しています。このDSTを用いて、新たなサービス・インタフェースを作成し、ID-WSFのフレームワークに基づき、属性情報を交換することが可能です。

### フェーズ3について

2004年から2005年にかけてのリバティ・アライアンスの活動は「フェー

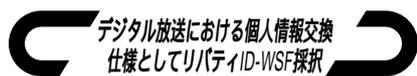


ズ3」と呼ばれ、技術仕様は各コンポーネントごとに大きな目標を達成しました。

まず、SSOに関してはリパティ・アライアンスのID-FF仕様群が、OASIS SAML 2.0として採択されました。SAML 2.0は、SSOに関する国際標準仕様として有力な技術であり、また普及の面でも有力視されています。

次に、ID-WSF仕様群については、ソーシャル・ネットワーク・サービスにおける個人情報管理を規定した仕様が新たに加わりました。さらに、ID-SIS仕様群については、従来の個人情報および従業員情報に加え、新たに、プレゼンス・サービス、位置情報サービス、コンタクトブックサービスの3つのWebサービス・インタフェース仕様が公開されました。

一方、日本における個人情報保護法実施初年にあたる2005年4月には、「Liberty Allianceと日本の個人情報保護法」<sup>(4)</sup>をリリースしました。



リパティ・アライアンスは、各業界の標準化団体と協力およびリパティ仕様導入支援を行う「リエゾン」活動を行っています。

2004年には、リパティ・アライアンスは、TV-Anytime Forum(TVA)<sup>(5)</sup>とリエゾンを締結しました。TVAは、欧州放送局およびベンダが主なメンバーであり、通信との連携と蓄積型放送

サービスの特徴とした新しい放送サービスのための国際標準策定を行っています。さらに、TVAで採択された仕様は、欧州電機通信標準化協会(ETSI: European Telecommunications Standards Institute)および社団法人電波産業会(ARIB: Association of Radio Industries and Businesses)に参照されています。

NTTは、リパティ・アライアンスおよびTVAの参加企業であり、双方の団体において、技術およびビジネスの点で主導的位置付けを確立しています。

このリエゾン締結により、TVAにおいて、リパティ・アライアンスのID-WSFv1.0仕様群が採択され、視聴者属性交換が規格化されました。さらに、この視聴者属性交換仕様(TVAフェーズ2 SP006-3)は、ETSI標準となることと決定しています(ETSI TS 102 822-6-3<sup>(6)</sup>)。具体的には、TVAですでに仕様化済みの3つのプロフィール(視聴履歴プロフィール、視聴嗜好プロフィール、個人情報プロフィール)が、リパティ・アライアンスのID-WSFv1.0の仕組みで、利用者の許可に基づき、管理・流通されます。



リパティ・アライアンスは、今後フェーズ4として、フィッシングやID盗難に対応するための「強い認証」に

ついて検討するグループを設立し、さらに、認証デバイスとサービス間における相互運用性について検討を進めていきます。引き続き、NTTはリパティ・アライアンスにおける標準化活動に参画します。

#### 参考文献

- (1) 古賀・宮田・高橋：“個人情報の管理・流通のための標準化団体「リパティアライアンス」の動向,” 信学誌, Vol.87, No.6, pp.504-507, 2004.
- (2) <http://www.projectliberty.org/jp/>
- (3) 寺田・高橋：“リパティアライアンスの標準化活動,” NTT技術ジャーナル, Vol.15, No.3, pp.79-80, 2003.
- (4) <http://www.projectliberty.org/jp/resources/lib-JapanPIPAAct-ja.pdf>
- (5) 川森：“TV-Anytime Forumの最新動向,” NTT技術ジャーナル, Vol.18, No.1, pp.85-87, 2006.
- (6) [http://webapp.etsi.org/action/PU/20060124/ts\\_1028220603v010101p.pdf](http://webapp.etsi.org/action/PU/20060124/ts_1028220603v010101p.pdf)